出土品を種類別に掲載し、金石文の或物では拓本を添へる懇切さがある。先づ墓誌、骨壺より始まり金銅佛、塑像、塼物、佛具、鏡鑑、大刃、玉類、革帶裝飾品、印、陶器、古錢、瓦塔、風鐸、鴟尾、瓦、塼、石像に至つてをり、寫眞及び印刷は頗る鮮明であつて餘す所がない。此等を通觀したゞけで奈良時代出土品に對する得難い知識を抱ける事は本書のもつ絶大な强味である。

更に本書をして錦上花を添ふるものは卷末に附された石田氏の執筆に係かる『出土品より見たる奈良時代の文化』及び『圖版解說』である。前者は石田氏の體系を簡明に記載された點で甚だ注目すべきものであり、後者は各遺物の寸法、形狀を記載して圖版を補充すると共に簡潔な考證を添へたもので、圖版と共に併讀さるべき述作である。かやうに本書は豐富な圖版と要領を得た圖版解說と以上に關する概說の三部から成り、這種刊行物として間然する所ないのである。たゞ慾を言へば、一遺跡の出土品がばら〳〵に掲載されてゐて、一括遺物として觀る上で不便である。此等は出土地別の目次によつて整理されるであらう。また圖版解說では各遺物に就いて從來發表された文獻を掲示してほしかつた。けれども此れは贅を得てまた蜀を望むが如き類ひであつて、奈良時代研究上に占める本書の重要さはかゝる微瑕によつて固より損はれるものではないのである。(菊四倍版、圖版一一六葉、原色版一葉、附錄六三頁、東京帝室博物館發行、定價二〇・〇〇)(角田文衛)

## 哲學及び宗教と其歷史

——波多野精一先生獻呈論文集——

石原　謙編

わたしの圓を亂してくれるな、と古のある哲人は云つたといふ。まことに學問研究に於いては自己の學問領域に忠實であり謙虛であり、徒らに他に干涉しないことこそ、學徒として何よりも心すべき義務であらう。しかし、自己の學問領域に忠實であることがその領域の殼の中にのみ閉ぢこもり、他の領域には目をふさぐことや、或は又その領域内に於いてのみ通用する眼でもつて、他の領域のものを觀察し、判斷することであつてはならない。それは決して眞に謙虛なのではなく、むしろ罰せらるべき一の傲慢(ヒュブリス)であり、越權でもある。學に眞に謙虛であるためには排他的・閉鎖的な態度ではなく、却つて受容的・開放的な態度でなければならぬ。學問のモンロー主義はきびしく排擊されねばならない。あらゆる他の學問領域について强い關心をもつことは眞に自己の學に謙虛なることではなからうか。

もちろん、徒らな多學博識や衒學を讃へるのではない。云ふ心は他の領域に對する鋭き觸覺と深き關心とであり、理解せんとする眞摯な態度である。學を廣くすることは、學を深く豐かにすることへ轉換の一つの道ではなからうか。

近時あらゆる方面に獨善、獨斷が横行し畸形的な「專門家」が跋扈してゐるかに感ぜしめる。學問の發達による極度の分化がかゝ

る存在を產んだといふことは、まことに悲しむべき事實である。畸形的であるのは恐らく「全體」への關聯の缺如のためであらう。オルガニスム的構成が新らしい時代の原理であるならば、所謂「專門家」も、より廣き「全體」と深い繫りをもつことが必要となる。小さい圓に閉ぢこもつて中心へと向ふのではなく、廣き周邊へ〳〵と向ふことによつて、中心を更に深くするのでなければならない。自己の專門外として目をつぶることは決して自己の專門に忠實なのではなく却つて傲慢であり、卑怯である。理解出來ぬとして横を向かず、理解せんと努力するのは、越權なのではなくして却つて謙虛なのである。只注意すべきは理解せんとするときの態度である。「自己の眼」を以てではなく、「彼の眼」を以てなすことを心がくべきであらう。複雜多岐な人間事象を研究の對象とする歷史學にあつては、特にこの意味での「謙虛」な態度が必要とされる。歷史家の深き體驗の一はかゝる態度によつて可能となるのではなからうか。

自らの不適なるを熟知しつゝも而もこの論文集を取上げる不遜を敢へてしたのも全く右の如き心からである。從つてこの論文集に編まれた多くの論文が夫々の學の領域に於いて如何なる意義をもつかは私の批評の範圍外であり、又勿論そのやうな批評能力も私にはない。否、個々の論文の忠實な梗概的紹介すら、菲才のために誤り傳ふることを懼れるのである。强ひて私の讀後感を述べることを許されるならば、學に對する純なる喜悅と同時に自己の知識の淺薄に對する深き慙怍とを感じたことを告白すれば足りる。事實この論文集の筆者達がいづれも、學德高き波多野先生の敎導と慈愛とに惠まれた幸福な門下の人達であり、而も現在我國のギリシヤ古典學、哲學及宗敎學界に於いて尊敬すべき權威であることを想起すれば、この論文集がもつ意義も自づから明となるであらう。

加ふるにこの獻呈論文集は波多野先生自身の著書と同じく、記念論文集に往々にしてみられるが如き、索莫たる內容を徒らに尨大にして豪華な外觀で覆はんとするが如きものではない。これは愼ましやかな、而もゆたかにして優れた內實を藏する香り高き論集である。そして讀む人のすべてに學問の魅力と愛着とを感ぜしめるであらう。裝飾的置物的な存在としてよりも、敎養の實質的必需品的存在として、一般に廣く讀まれる方が、記念論文集としては、遙かに記念さるべき意義をもつのではなからうか。私は自己の學に謙虛たらんとする人は一人でも多くこの書を讀まれんことを希望する。それは自己の知識を測るバロメーターとして、又、畸形的な專門家の醱酵を防止する殺菌劑として役立つであらう。まことに良書は萬人に讀まれねばならない。波多野先生の御健在を祈りつつ、論集の興味ある題目と筆者とを列記して、この體を備へさる紹介の一文を終りたい。

第一部　ギリシヤ古典學　「オレステイア」に於けるポリスと家族の衝突の問題(和辻哲郎)、「雲」のソクラテス(田中美知太郎)、エレア派のヅェーノーンの哲學(長澤信壽)、アリストテレスに於

ける人間と政治(高田三郎)

第二部　哲學及び哲學史　理性の根據に就いて(高山岩男)、解釋學と修辭學(三木清)、存在と無限—無限の概念について哲學史的考察—(三宅剛一)、ミケランゼロの同心(木村素衛)、物自體と理念(高坂正顯)、惡の根源の問題—殊にカントとシェリングに關して—(安倍能成)、カントからヘーゲルへの論理(田邊元)、ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト(西谷啓治)

第三部　宗教學及基督教神學　學としての神學—神學のロゴスの特殊性格—(松村克己)、聖なるもの—オットーの批評を中心として—(片山正直)、シュライアマッハーに於ける「高次的實在論」—「講演」の一考察—(中村明)、バルト神學に於ける中心的なもの(菅圓吉)、歴史的・批判的方法と靈的理解—バルト神學に於ける一つの問題—(佐野勝也)、舊約宗教に於ける人間觀に就いて(石原謙)、「神の國」と「人の子」(一平信徒の歴史觀の一節)(神田盾夫)、パウロの神學に於ける聖化(山谷省吾)、明治維新の教化統制と平田神道—信教の自由の公認まで—(村岡典嗣)、後記(石原謙)(新版五九四頁、昭和十三年九月、東京岩波書店發行、定價三・六〇)

(前川貞次郎)

## Population Movements.

### By Robert R. Kuczynski

世の中はめまぐるしい。失業は過剰人口の爲だ、あの人は子供が少いから裕福だ、と思つてゐたら今日では失業は過少人口に基くと云ふ事であり、あの家は子供のお蔭で勳章を貰つた許りか、年金の爲に内福ださうだ、と云ふ國もある。二十年前の眞理は一片の虚構と化し去つてゐる人口論の變遷、其は現代の歐洲社會の動搖を如實に示したものと云へよう。

本書はロンドン大學に於ける三つの公開講義から成つてをり、各部は夫々獨立のものではあるが、八十頁の小著の中に人口研究についての貴重な、暗示に富むを意見を展開し、人口推移についての通俗的意見の誤謬を指摘すると共に、平易な説明、叙述によつて人口研究への一般人の興味を誘ふ樣な内容をも盛つてゐる。

第一部に於て、先づ地球上の人口について吾人の知識が如何にして得られ、その基礎となる人口統計がどの程度の信頼を置けるものかを論じ、諸大陸の最近百年間の人口の推移を略述する。かくて近代に於ける最大の人口の推移の見られるのがアメリカ大陸であり、そこに黑人及白人による居住が如何にして行はれたかを幾多の史料を引用しつゝ論證してゐる。著者は奴隷貿易による黑人移入數に關する通説の見積りが過大に失する事を當時の海運業等の經濟史的見地より説明してゐるが、此はアメリカ大陸に於ける眞の意味の居住が先づ黑人により行はれたとする意見及び移住當初の人口增加の不振を男女の數的不均衡に基くとなす見解と共に注意すべき點であらう。移住者數を正確に知る事の困難は二十世紀初頭に至るも旅客統計しか無い國々が多かつた事を顧みれば判然する。就中、白人について著しい。併し、一四九二年以來の移住者は黑人千五百萬、白人四千萬で、現在各〻四千萬、一億七